

二月月以上にわたってお読
み頂いたこの連載も今週で終
わ。これまでは内外ジャズ
ミュージシャンを中心に書い
てきたが、この週はもしジャ
ズにのめり込んでいなかった
らお知り合いになれなかった
と思う音楽家以外のすてきな
方々のお話をしてみたい。も
っとも、いへらのタイトルが

△(28)▽



「ジャズは友達」にしても、
敬愛こそすれ友達呼ばわりは
あまりにも申し訳ない人た
だから、そのおつもりで

見山氏からのお誘い
「スイングジャーナル」で
レコード評を担当していたの
はもうひと昔以上も前のこ
と。編集長だった見山紀芳さ
んからの「そろそろ私どもの
雑誌に書いて頂けませんか」
といつお誘いの言葉は今もよ

ジャズ評論に新風吹く 植草氏の熱中度に刺激

評論 植草基一 (映画評論そ
のほかのエッセイスト) 清水
俊彦(詩人) 鎌倉幸信(アメ
リカ詩、慶応大学教授) 悠雅
彦(音楽評論) 高柳昌行(キ
ャリスト)、医学関係からは
牧芳雄(精神科、東海大学教
授) 粟村正昭(内科) 安斎雅
夫(外科) それに僕(外科)
——とまあ自分を含めてい
つものおかしけれど異色の顔
ぶれだったような気がする
ね。中でも同様見山編集長に
引つ張り出された植草基一さ
んは、そのすばらしいジャズ
エッセーに、僕が最も刺激と
影響を受けて教えられること
の多かった方だ。

四十九歳で突然ジャズに目
を開いた植草さんは、せきを
切ったような勢いで信じられ
ない量のLPを聴き、それを
独自の解釈とだれにもまね
できない文体で、次々におび
たらしい数の評論を発表され
たが、幸運にも僕はその精力的
な聴き方を、目のあたりにで
きたのだ。六〇年代後半、僕
はヨーロッパのあちこちで、
国内ではまだ手に入らぬLP
を買い集めてきたが、さてY
JCの会員にもと考えたもの
のジャケット解説が各国さま
ざまの言葉でさっぱり分から
ない。

レコードと夜あかし

そこではた思いついたの
が植草さん。早速電話をかけ
ると「面白そうだからやりま
しょうよ。だけど僕はね、戦
後箱根を越したことがないか
ら飛行機でも行きまます
て、その院長が大のジャズ
ファンなのだ。あと半年した
らお返しなんてとてもお
たんだから」と頑としてふと
んには入れなかつたなあ。
語り継ぎたい思い出
それから間もなくエッセー
でユーモアたっぷりに、「あ
辺真夫といつた植草さんをた
まらなく愛しておられる方々
に交じって執筆者の一人にさ



ジャズ評論家としても素晴らしい才能があった植草基一さん

の植草さんは、僕がターンテ
ーブルにのせる五十枚ほどの
LPにじっくりと目を傾ける
一方、猛烈なスピードでノー
トにぎつりとメモを取りな
がら夜もすがら。朝がたよう
日ハロインをうってもらっ
て「そうしようと考えてい
ると、とてもうれしくなっ
てひと安心。このソファがす
っかりお気に入りの植草さ
ん、二度目にお越しの時も
しみを感じてしまったね。

そのお返しなんてとてもお
こがましいが、その夜の思
出を「植草基一読本」に「植
草さんの泊ったソファ」と題
して書いたんだが、池波正太
郎、南博、双葉十三郎、田村
隆一、虫明亜呂無、それに渡
辺真夫といつた植草さんをた
まらなく愛しておられる方々
に交じって執筆者の一人にさ

せていたんだから恐縮
してしまつたなあ。
ジャズ評論の世界に、文学
の薫り高いさわやかな新風を
吹き込んだ植草さんの、せめ
ぎ断りでも語り継ぐことが
できた。それが大好きな
植草さんへのささやかな恩
返しになるのだろうか。

(内田 修)